

C-3

日本語の動詞的名詞に対する副詞的修飾とイベント項

尾崎慶（獨協大学大学院）・安井美代子（獨協大学）

(1a)には2つの読みがある。(1b)は形容詞と述語名詞が定義する集合の共通部分（積）に主語が属するという積演算的（intersective）読みであるが、(1c)の読みでは *beautiful* は積演算的ではないように見える。

- (1) a. Olga is a beautiful dancer.
b. Olga is a dancer and Olga is beautiful.
c. Olga dances beautifully.

Davidson (1967)は動詞が動作主などの項に加えて、動詞が表す事象にあたるイベント項を持つと仮定し、(1c)の副詞などはイベント項に適用すると分析した。Larson (1998)はイベント項を *dancer* などの名詞にも仮定することにより、形容詞が主語項に積演算的に適用すれば(1b)、イベント項に積演算的に適用すれば(1c)となり、形容詞そのものを積演算的・非積演算的に分ける必要はないと論じている。本発表では、「花子は過剰な消費者だ」などの日本語の類例を取り上げ、どういう場合に(1c)のような読みが可能かを検証する。

1. 日本語の動詞的名詞とイベント項

beautiful は人も動作も修飾しうるが、(1b)の解釈では Olga は踊りが下手で、(1c)では Olga は容貌が魅力的ではないという可能性があり、2つの意味を明確に区別できる。一方、*graceful* は人を修飾する場合も、容貌よりは身のこなしについて言う形容詞なので、(1a)の *beautiful* を *graceful* で差し替えると(1b,c)ほどの明確な解釈の差がでない。そこで、(1)の日本語の類例を考えるにあたり、以下のように人に適用しない修飾語を検討する。

- | | | |
|-----------------------------------|-----------|------------|
| (2) a. 花子は過剰な <u>消費者</u> だ | b. 過剰な消費 | c. ??過剰な人 |
| (3) a. この会議では突然の <u>発言者</u> がいて困る | b. 突然の発言 | c. ??突然の人 |
| (4) a. この機械は定期的な <u>修理人</u> が必要だ | b. 定期的な修理 | c. ??定期的な人 |
| (5) a. 田中氏は潤沢な <u>出資者</u> だ | b. 潤沢な出資 | c. ??潤沢な人 |

(2)-(5)の下線部は、(6a)で見るとように軽動詞スルをとり、主語、目的語などの項を伴った通常の動詞構文をとることができる。

- (6) a. 外国人観光客が東京で多くの食材を消費する
b. 外国人観光客の東京での多くの食材の消費
c. 外国人観光客が東京で多くの食材を消費の際は、景気がよくなる

さらに(6b)のように名詞としても項構造を保持し、(6c)のように「際」などの時を表す形態素が作る構文で、スルなしで動詞構文と同じ格助詞パターンをとる。Sugioka (1989)は(6b,c)の性質を項構造の保持と呼んでいる。スルを直接とり項構造を保持する形態素は動詞的名詞と呼ばれ、名詞や動詞とは別の品詞であると分析するのが標準的である (Tsujimura 1996, Section 1.8 及びそこでの参考文献)。

(7) 動詞的名詞の特徴

- a. 軽動詞スルを伴って動詞構文をつくる
b. 項構造を保持する

Davidson (1967)は動詞がイベント項を持ち、副詞的要素はイベント項に適用すると主張した。以下のよう
に動詞的名詞もイベント項を持つと仮定するのは自然である。

(8) 動詞および動詞的名詞は語の内在的性質としてイベント項を持つ。

(8)を仮定すれば、(2a)-(5a)の下線部はイベント項をもつことになり、(1)が持つ(1c)の副詞的修飾の解釈と
並行的に分析できる。

次に、漢語系の動詞的名詞以外が副詞的修飾の解釈を許すか検討する。Sugioka (1989)は動詞連用形複
合語 (V-V 複合語と呼ぶ) はスルをとり、項構造を保持するが、単純動詞連用形はどちらも不可能であ
ることを観察している。

(9) a. 売り買いする / *買いする

b. *外国人の東京での多くの食材の売り買い / *買い

c. *外国人が東京で多くの食材を売り買い / *買いの際は、景気がよくなる。

単純動詞連用形で(2a)-(5a)の類例を作ると、容認性が低くなる

(10) a. ??花子は過剰な買い手だ。

b. ??この会議では突然の話し手がいて困る。

c. ??この機械は定期的な直し手が必要だ。

d. ??田中氏は潤沢な貸し手だ。

(7)に従うと、単純動詞連用形は動詞的名詞ではなく、イベント項を持たないので、(1)が持つ(1c)と並行
的な解釈ができないと説明できる。一方、V-V 複合語で(2a)-(5a)の類例を作ると容認性が高い。

(11) a. 毎週末の食べ歩き日記

b. 毎週末の日記

(12) a. 2時間置きの見回り人

b. *2時間置きの人

(13) a. 2週間以上の貸し出し書籍

c. *2週間以上の書籍

(11a)-(13a)の下線部は V-V 複合語部分を修飾し、名詞にかかる(12b), (13b)は容認不可である。(11b)は意
味的に可能であるが、「食べ歩き」にかかる解釈とは明確に異なる。(7), (8)に従うと、V-V 複合語は動詞
的名詞であるのでイベント項を持ち、(11a)-(13a)の副詞的修飾の解釈は(1c)と同様に説明できる。

最後に、V-V 複合語ではなく、第一要素が動詞以外の複合語(X-V 複合語と呼ぶ)について検討する。
Sugioka (2001, 2002)は第1要素 X が動詞の項である場合は動詞的名詞の性質を示さず、付加詞であると
動詞的名詞の性質を示すことを観察している。

(14) a. 本を読む

b. *本読みする

c. *太郎が自室で本読みの際

(15) a. 斜めに読む

b. 斜め読みする

c. 太郎が自室で本を斜め読みの際

(7),(8)に従うと、「本読み」は動詞的名詞ではなく、イベント項を持たないが、「斜め読み」は動詞的名詞
でイベント項を持つことになる。このことと(2)-(6), (9)-(13)で見た事実には関係があるのだろうか。

2. 統語構造と語構造における意味計算

2.1. 意味計算に必要な合成規則

まず、動詞句(14a)と(15a)の意味計算にどのような違いがあるか考える。Davidson 流のイベント意味論

に関してはいくつかの枠組みがあるが、本研究では Kratzer (1996)、Marantz (1984)の主張に従って(16a)のような例文に対して Theme を動詞の内項とし、Agent や付加詞を独立した述語として扱う(16b)を採用する。

- (16) a. Jones buttered the toast slowly
 b. butter(x,e) & Agent(x,e) & slow(e) & ...

また、以下の合成規則 (compositional rules) を仮定して意味計算を行う。

- (17) Compositional Rules (Heim&Kratzer 1997: 105-106, Kratzer 1996:122)
- a. Functional Application:
 If α is a branching node, $\{\beta, \gamma\}$ is the set of α 's daughters, and $[\beta]$ is a function whose domain contains $[\gamma]$, then $[\alpha] = [\beta]([\gamma])$.
 - b. Predicate Conjunction (general):
 If α is a branching node, $\{\beta, \gamma\}$ is the set of α 's daughters, and $[\beta]$ and $[\gamma]$ are both in D_f , f a semantic type which takes n arguments, then $[\alpha] = \lambda(a_1, \dots, a_n). [\beta](a_1, \dots, a_n) \wedge [\gamma](a_1, \dots, a_n)$.
 - c. Argument Identification:
 If α is a branching node, $\{\beta, \gamma\}$ is the set of α 's daughters, where $[\beta]$ is in $D_{\langle a, \langle b, c \rangle \rangle}$ and $[\gamma]$ is in $D_{\langle b, c \rangle}$, then $[\alpha] = \lambda x_a. \lambda y_b. [\beta](x)(y) \wedge [\gamma](y)$.

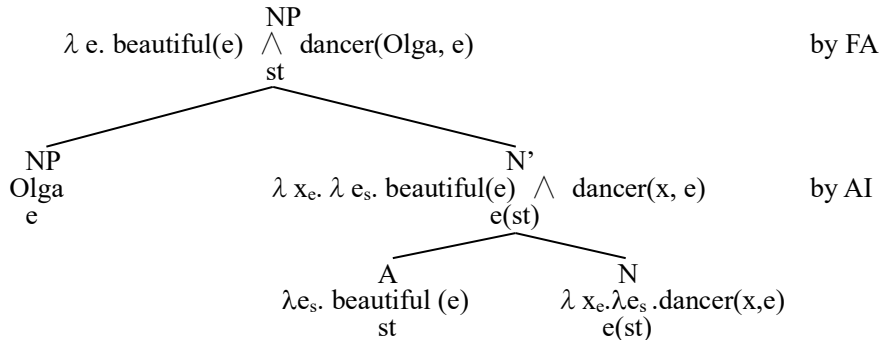
(17c)は Kratzer (1996)の Event Identification を一般化したものである。

2.2. A beautiful dancer と「過剰な消費者」の分析

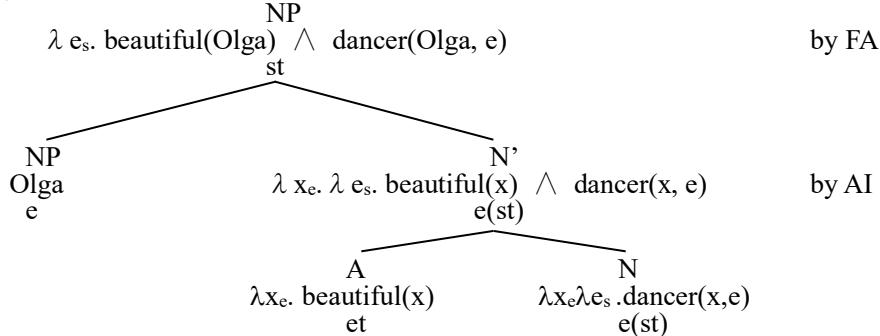
ここで(1a)に戻り Larson (1998)による分析を(17a-c)の合成規則で定式化する。(8)に従い動詞 *dance* がイベント項を持つと仮定し、語彙形成の際、それが *dancer* に引き継がれると仮定する。本稿では(18a)のように *Olga* は述語名詞 *dancer* の内項であると考ええる。また、be 動詞 *is* は意味的に空として無視する。

- (18) a. [NP Olga (a) beautiful dancer]

- b. Olga is a beautiful dancer. (non-intersective)



- c. Olga is a beautiful dancer. (intersective)



(18b)では *beautiful* は *dancer* が導入する *e* を項にとりイベントを修飾するが、(18c)では *x* を項に取り *dancer* が意味する個体を修飾する。「過剰な消費者」も同様に分析できる。動詞的名詞「消費」がイベント項をもち、それは派生名詞「消費者」に引き継がれる。(18b)と同様に「過剰な」は *e* を項にとり、副詞的修飾の解釈ができる。Roy&Soare (2011:12)が英語では *big consumer*、フランス語では *Les gros consommateurs* の例をあげ、それぞれ *big* と *gros* は副詞的修飾の解釈になることを指摘している。

2.3. 意味計算における内項と付加詞の違い

動詞派生語の分析に入る前に、(19)の他動詞「読む」と副詞「斜めに」を含んだ下線部の VP を合成規則に基づいて分析する。使用する語彙の意味は(19)とする。イベント項のタイプは *s*、individual 項は *e* で命題のタイプは *t* と表記する。

(19) 「太郎 が 斜めに 本 を 読んだ。」

(20) 1. [[本]]= **book**

2. [[読む(yom)]] = $\lambda x_e . \lambda e_s . \text{read}(x, e)$

3. [[斜めに]] = $\lambda e_s . \text{cursory}(e)$

(21) 1. [[本を読む]] = $\lambda e_s . \text{read}(\text{book}, e)$

by FA

2. [[斜めに本を読む]] = $\lambda e_s . \text{cursory}(e) \wedge \text{read}(\text{book}, e)$

by PC

(22)

VP
 $\lambda e . \text{cursory}(e) \wedge \text{read}(\text{book}, e)$
st

by PC

AdvP
 $\lambda e_s . \text{cursory}(e)$
st

VP
 $\lambda e_s . \text{read}(\text{book}, e)$
st

by FA

N V
book $\lambda x_e \lambda e_s . \text{read}(x, e)$
e *e(st)*

(21)-2 では *book* を項としてとった他動詞 *read* と修飾語 *cursory* はともに *e_s* を項にとるタイプ *st* であるため、PC がかかる。PC にはイベントが含まれていなければならないという制限はないが、項数が一致して、共通項が必要であり、ここではイベント項である。よって実質的にイベント項がないと PC は適用できない。

「斜め読み」に対応する VP 「斜めに読む」の意味計算は以下ようになる。

(23)[[斜めに読む]] = $\lambda x_e . \lambda e_s . \text{cursory}(e) \wedge \text{read}(x, e)$

by AI

内項が満たされている他動詞 (21) では *cursory* と共にタイプは *st* のため PC を適用したが、(23) のように内項がない場合、AI が適用される。用いられる合成規則こそ違いますが、どちらもイベントを共通項として持つため、等位接続の PC/AI がかかりうる。

語形成プロセスに(17a-c)の合成規則が関与するかどうかは定かではないが、「本読み」や「斜め読み」などの X-V 複合語は日本語では非常に数が多い。生産的な語形成の意味計算には(17a-c)が関与すると本研究では仮定する。これに従えば、「斜め読み」も(23)と同様、「斜め」と「読み」は AI により複合することになる。一方「読み」がその内項と複合した「本読み」は動詞的名詞の性質を示さないことを2節

で見た。「本読み」の意味計算が(22)の動詞句のように行われるとすると、関与する規則は FA である。(17a)で示したように FA の適用にはイベント項の有無は関係がない。複合語の意味計算にイベント項の存在が必須かどうか、その複合語が動詞的名詞として振る舞うかどうかと関係すると一般化できる。

「読み」は(24a-c)の場合は名詞として統語構造に現れる。

- (24) a. 太郎の読みは深い。
 b. 皆さん、本読みの習慣をつけましょう。
 c. 皆さん、斜め読みはやめましょう。
 d. 学生がチョムスキーの論文を斜め読みの際、教授は激怒した。

(24b)が示すように「本読み」も名詞として振る舞う。一方「斜め読み」は統語構造で(24c,d)は示すように動詞的名詞の性質を持つ。語形成の段階で「読み(yom)」はカテゴリーが未決定であると考え、動詞と動詞的名詞はイベント項を持つが、カテゴリー未決定の「読み(yom)」はイベント項の有無も未決定であるということになる。生産的な X-V 複合語の意味計算には(17a-c)が適用するとすると、「斜め読み」の意味計算には「読み」がイベント項をもつことが必要であったが、「本読み」では「読み」がイベント項を持たなくても FA が適用できることを見た。カテゴリー未決定の「読み」が複合語を作るとき、イベント項が必須であればその複合語がイベント項を持ち、そうでなければその複合語がイベント項を持たないと主張する。

「読む」は他動詞であるが、「起きる」「泣く」といった自動詞も副詞的要素を第一要素とする「早起き」「大泣き」のような複合語を形成できる。ここでは複合語「早起き」に対応する VP「早く起きる」を上記の合成規則を用いて分析する。

- (25) 1. [[早く]] = λe_s .early(e)
 2. [[起きる]] = λe_s .wake(e)
 3. [[早く起きる]] = λe_s .early(e) \wedge wake(e) by PC

自動詞「起きる」は (21)-2 の内項が満たされた他動詞「読む」が付加詞と組み合わせる時と同様に等位接続の PC がかかり、「早く起きる」となる。PC の適用にはイベント項が必須であるから、(8) に従い「早起き」は動詞的名詞になり、スルを直接とるという性質などが説明できる。

2.4. V-V 複合語の意味計算

2節で和語連用形同士の V-V 複合語もスルがつくものがある。その際、他動詞＋非能格自動詞でも、他動詞＋他動詞でも構わない。

- (26) V-V 和語連用形
 a. 食べ歩きする (他動詞＋非能格自動詞)
 b. 見回りする (非能格自動詞＋非能格自動詞)
 c. 貸し出しする (他動詞＋他動詞)

これらは「食べ歩く」、「見回る」、「貸し出す」という「する」を使わない形も可能である。一方、(27)のように第一要素と第二要素が同時に起こったイベントではなく、第二要素が第一要素の結果を表す複合語には「する」がつかない。

- (27) a. *積み重ねする = 荷物を積んだ結果荷物が重なる
 b. *焼け死にする = 焼けるという過程を経て死ぬ
 c. *崩れ落ちする = 崩れるという過程を経て落ちる

スルをつけられる V-V 複合語は二つの動詞が表すイベントが同時であることを要求すると言える。

つまり複合化される動詞が同じ1つのイベント *e* を共有していなければならない。(17) の合成規則を用いて (26a) を分析してみる。

- (28) a. [[食べ]] = $\lambda x_e . \lambda e_s . \text{eat}(x, e)$
 b. [[歩き]] = $\lambda e_s . \text{walk}(e)$
 c. [[食べ歩き]] = $\lambda x_e . \lambda e_s . \text{eat}(x, e) \wedge \text{walk}(e)$ by AI

「食べ歩き」は食べることと歩くことが同じに起こるイベントである。(28c)に適用するのは AI であり、実質イベントを必要とする規則である。よって適切な分析だと言える。

3. 残された課題

本研究では、「消費」が動詞的名詞であるのでイベント項を持ち、そのイベント項が派生名詞「消費者」に引き継がれ、「過剰な消費者」のような副詞的修飾句を持つ表現が可能となると分析してきた。この考え方に従えば、*dancer* は動詞 *dance* からの派生名詞としてイベント項を持ち、副詞的修飾の解釈が可能になることになる。一方、Larson (1998)は以下のような例をあげ、動詞派生名詞以外にもイベント項を仮定している。

- (29) a. Peter is an old friend.
 b. Jerry is a former president.
 c. Arthur is a just king. (Larson 1998)

Winter and Zwarts (2012) は *beautiful ballerina* には *beautiful dancer* が持つ(1c)の副詞的な解釈が難しいという判断をしており、(1c)のような読みは動詞派生名詞に限られるとしている。Maienborn (2020)は Larson の分析を修正し、動詞派生名詞以外にも(1c)のような読みが可能であるとしている。「過剰な消費者」に見られる副詞的修飾の解釈が動詞的名詞に限られるかどうか結論づけるにはより多くのデータを検証する必要がある。

参照文献

- Davidson, Donald. 1967. The logical form of action sentences. In N. Rescher, ed., *The logic of decision and action*, pp.81-120. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Heim, Irene and Kratzer, Angelika. 1997. *Semantics in generative grammar*, pp.105-106. Malden: Oxford Blackwell.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 東京:ひつじ書房.
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In Johan Rooryck and Laurie Zaring, eds., *Phrase structure and the lexicon*, pp.109-137. Dordrecht: Boston Kluwer Academic Publishers.
- Larson, Richard K. 1998. Events and modification in nominals. *Proceedings from semantics and linguistic theory (SALT) 8*:145-168.
- Maienborn, Claudia. 2020. Revisiting Olga, the beautiful dancer: An intersective A-analysis. *Proceedings from semantics and linguistic theory (SALT) 30*: 63-82.
- Roy, Isabelle and Soare, Elena. 2011. Nominalizations: new insights and theoretical implications. *Recherches linguistiques de Vincennes 40*: 7-23.
- 杉岡洋子. 1989. 派生語における動詞素性の受け継ぎ. 久野暁・柴谷方良(編)『日本語の新展開』pp.167-185. 東京:くろしお出版.
- Sugioka, Yoko. 2001. Event structure and adjuncts in Japanese deverbal compounds. *Journal of Japanese linguistics 17*: 83-108.
- Sugioka, Yoko. 2002. Incorporation vs. modification in Japanese deverbal compounds. In Noriko Akatsuka and Susan Strauss, eds., *Japanese/Korean linguistics 10*: 496-509. Stanford: CSU Publications.
- Winter, Yoad and Joost Zwarts. 2012. Event orientated adnominals and compositionality. Unpublished ms., In *proceedings of Annual Meeting of the Israeli Association of Theoretical Linguistics*, October 2012, Tel-Aviv.
- Yumoto, Yoko. 2016. Conversion and deverbal compound nouns. In Kageyama, Taro and Hideki Kishimoto, eds., *Handbooks of Japanese lexicon and word formation*, pp.311-345. Boston/Berlin: Walter de Gruyter.